
黒乃魔術師

てん

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

黒乃魔術師

【コード】

N0435Y

【作者名】

てん

【あらすじ】

彼は異端だった。彼は特殊だった。彼は特別だった。それゆえに。

これはもしも現代に魔術が存在していたらあの仮想の世界のお話。そこのとある学園に変わり物同好会所属の四人を軸に話を進めていきます。

はじまり

こつ、こつと暗がりの中に乾いた靴の音が響く。

冬の真夜中の学校の校舎、中年の警備員が一人、最終の見回りをしていた。手には懐中電灯、真夜中になると電気の供給を一切遮断してしまう学校の方針のせいで警備員一同はいつも億劫な思いをさせられていた。

「ふう、寒いなあ。」

誰かが放置して帰ってしまったようで、ちょうど最後の教室の窓が空いたままである。最近はずっと寒くなってきた。寒いので夏場と違って夜の見回りは気温の面でも辛い。学生たちの中で文句をいいつつも、彼はその窓を閉め、鍵を掛けた。

「ふう。」

ようやく帰れる。

彼はその豊かなおなかを揺らし、一つのびをする。

どうにも最近動きずらくなってきたような気がする。この前の健康診断でも少し危ない数値だったし、やっぱり運動はするべきかな。

仕事終わりの余韻に浸り、そんなことをぼんやり考えながら窓の外のを眺めていると、不意に背後から何かの物音が聞こえた。

「ん？」

振り返る。

「んん？」

手に持った懐中電灯でそこらを照らしてみても、あるのは生徒たちの机と椅子、教壇のみ。いくら探してみても何かが落ちたような跡さえもなく。はて、と彼は首をかしげるも気のせいか、と思いなおし教室をでようと歩みを進めた。

今日は奮発して、いいもん食って帰ろうかな。同僚を誘って飲みに行くのもいいかもしれない。

この後の自分へのご褒美に思いをはせながら教室の扉に手を掛けた時だった。

またもや背後で何かが落ちたような少し大きめの物音。彼は伸ばしかけた手をびたりと止めて首だけで振り返る。

「？」

やはり何も見つからず。しかし一度ならず二度も物音を聞いてしまったのだ、気のせいで済ましては自分が雇われている意味がない。

少しだけ彼は不気味さを感じながらも体も振り返らせる。

「なんだってんだあ？」

しかし、とりたてて怪しい人物はなく。遮る物のないこの空間でそんなものがあつたら一発で発見できるのだが。

そして、さらに足元を中心に照らしながら教室を二三周してみるもののこれといって怪しいものはない。それどころか週末の今日はきちんと掃除がなされておりゴミの方が少ないくらいだった。

彼は次第にきつと空耳だったのだと、都合のいい方に考え始める。それは人間としては自然の思考回路、だんだん深くなってゆく不安の紛らわすためにも必要なことだった。

むろん、ごく普通に考えてみればこんなしがない田舎の学校の真夜中の教室である、何が悲しく侵入なぞしななければならないのか。どうかんがえても空耳の確率の方が高かったし、それで完結させてしまふべきだった。しかし

どつやら今日の彼は運が悪かったらしい。

「うおおおおお！！」

突然の振動。中々大きな規模であるらしいそれに彼は耐え切れず教壇に尻もちをついてしまう。

教卓の下に隠れようにも動けなくなるほどの揺れによって彼には耐えることしかできず、できたのは事態の急変についてこれていない脳みそがパニックから戻ってくるのを待っていることだけだった。

果たしてどれほどの時間だったのか、それが終わった頃には教室中の備品は散乱しつくし、彼はようやく自分地震にあったのだろつと認識し始める。

「　　おおお、すごかつたあ。」

あまりの驚愕に思わず一人ごつ。そしてよつこらせ、と重い体を持ち上げたところでこの日最大の悲劇が彼を襲つた。

「　　おお!?!」

平衡感覚のない状態で無理に体を持ち上げたためにバランスを崩して彼は、黒板の方に倒れこんでいつてしまふ。とつさにぶつからなように手を突き出してちようど黒板の表面と接した時、何故か、ぱりつという乾いた音とともに、いとまたやすくそれをぶち破りその奥の空間へと彼は投げ出された。

「　　おおおおおおおつおおつお!!」

彼の悲鳴が落下とともに聞こえなくなつてゆき、やがて夜の静寂へと戻つてゆく。残つたのは荒れ果てた教室と不自然に大きく穴のあいた黒板、彼の所持していた懐中電灯が一つ、床に転がっていた。

はじまり（後書き）

なんともしまりのなく、わけのわからんプロローグですいません。

というかプロローグが完結してないですね。

本当はこの後も話を続けてかこうかと思ったのですが、とりあえず
ぼかして本編へと話を続けます。

のちのち本編とも接続してゆく予定ですので、とりあえず初心者だ
なあと鼻で笑って許してください。

?

とある学校の一室。

大きな音をたてて跳ねる机。自らの手を机に叩きつけ身を乗り出した格好になった少女は、その燃えるような赤い瞳で室内を見回した後、その凜と響く声を走らせた。

「注目!!」

同じ室内にいるその他の少年少女は3名、その内の2名が手を止めて顔を上げ、その少女へと視線を移す。困惑を顔に張り付けながらその中の一人、小柄で黒髪の少し気弱そうな少年が戸惑いがちに声をあげた。

「えと、どうしたの?」

その問いには答えずに、少し不機嫌そうに瞳と同じ色の鮮やかな長髪を一掻きしてから少女はおもむろに口を開いた。

「ねえ、教えてちょうだい白^{じくも}。此処は一体どっかしら?」

「え?え、えと 部室 かな?」

少年の返答に少女は、さらに少しだけ顔を不機嫌そうなものへと変える。そして言葉にわずかのいらつきをのせて再度、今度はその隣の桃色の髪を持つ、おっとりとした雰囲気少女に問いかけた。

「晴美、ここの部活名を言ってごらんさい。」

「でも 如月さん。そんなこと言っても何をすればいいのですか？」

「そうだよ 探偵事務所っていつでも、誰からも依頼なんか来ないし、することないと思うんだけど。」

困ったようにほんわかとした笑みを浮かべる少女と、苦笑いをする少年の抗議にその少女は高らかに宣言する。椅子に片足を乗せ、胸を張って微笑を浮かべながらあたかも自分が正しいかのよう。

「事件がないなら、事件を探せばいいじゃないの！！」

言っていることはわりかし暴論ではあったのだが。

「さすがに無茶あるで。そんなぼんぼん事件起こったらたまらんやろ。だいいち探偵事務所いうても同好会やし実質便利屋さんみたいなもんやないですか。」

「うーん、まあそうね。まだ開いてから1カ月あまり。未だ新人のあなたたちにはそこまで求めるのも酷かもしれないわね。」

「なら どうするの？」

その問いかけに待ってましたと言わんばかりに不敵な笑みを浮かべる少女。

「だから言ったじゃないの、聞きなさい。あんたたちがぼわぼわしているあいだに所長たる私が面白そうなネタを見つけてきてやったわよ。」

「あらずごい、この同好会を開いてから初めての事件ですね。」

「そうだね。思えば僕たちこの同好会に入ってから一カ月、ずーっと放課後にこの部室にやってきて時間をつぶしてきたんだ。すごいや。」

あはは、とのんきに笑う少年に再び青筋が浮かびそうになるも、少女はぐっとこらえ口を開く。

「それで、そのネタの方なんだけれど。あなたたち、最近噂になつてる話題知つてるかしら？」

その問いかけにそれぞれ頭をひねるもどうやら該当する事柄はないようで、再びお茶をすすつたり、困つたように笑つたり、素直に頭を横にふるなど各々否定の意を見せる。

「そう。あたしも最近聞くようになったんだけど、変なうわさが二つあって 確か ああ、そうそう。夜中になると ええと なんか変なうめき声みたいなのが聞こえるって話なのよね、少し眉つばっばいけど。」

「いやいや、なんやその昔ながらの学校七不思議みたいなんわ。さすがに嘘やろ。ってかいったい誰が夜中の学校のうめき声を聞くんや。」

「あはは まあ確かに少しうそくさいかな。」

「ですねえ。」

なんだかんだで期待していたのか、少し興味がそがれたように言う自らの部下たち。なんだかなあ、と心の中で愚痴りながらも少女は話を進めた。

「文句言つたらネタもつてきなさいよネタ。 まったく。 まあ、いいわ、もう一つのほうは現実的だし、わりかし面白そうよ。」

「へえ どないなん？」

「最近学校のいたるところで発見された妙な魔力残留のことよ。」

「魔力残留？生徒のいたずらではないのですか？」

「ええ、最初は先生たちもそう思ってたらしいわ。 軽いいたずらで生徒が魔法使つてそれがのこるってこともわりとあるらしいし。 今回もそれで魔法を使つてその残りかすが漂つてるだけなんじゃないか、って。 でもわりと頻繁に痕跡が見つかったらしくて、最近ちよつと本格的に調べようかって話が出てるらしいの。」

「へえ、なんか面白そうだね、ちよつと不気味だけど。 でもそんな話どつから仕入れてきたの？噂って言ってたけど僕は聞いたことないな。」

「まあ、確かにあたしも知らなかったからね。ぶっちゃけ二つ目とかは先生の間噂なのよ。」

「ああ 内海うちみさんか。」

「誰たれや？」

「兄貴よ、ここの教師やってるの。」

「まあ、お兄様が？若いのでしょうか？優秀なんですね。」

「まあ、優秀つちや優秀なだけどねえ。」

その言葉に、思わず目の前の少女の筋肉質の兄を思い出す黒髪の少年。幼少からの付き合いよりお互い知らないところの少ない間柄であるだけに、その優秀という言葉には苦い顔と乾いた笑いを禁じ得なかった。

「おお、せや。黒乃と如月はんは幼馴染やったな、そのお兄さんのこと知つとるんやろ？」

「うん　まあ　あはは。」

「？」

しかし事情をしらない他の二名は、その要領を得ない回答に首をひねる。

「とつてもいいひとだよ　うん、とつても。」

とりあえず当たり障りのないように言葉を濁して伝える。別に嘘をいつているつもりはない、むしろ本心ではある。

己の身内の恥が露見する前にと、少女は咳払いを一つして話をもとにもどす。

「まあ、兄貴のことは今はいいわ。で、どう？なかなかだと思わ

ない？」

「　そうですねえ。暇つぶしにはちょうどいいんじゃないでしょうか。」

「　せやね、そろそろここで腐つとるのも飽きてきたころやし、ええんやないの。」

「　うん。」

そして、部員たちのわりかし肯定的な返事をつけた少女は満足そうに笑みを浮かべ、握りこぶしを作った片腕を振り上げて言い放った。

「　あんたたち！！秋奈探偵事務所の初事件、気合い入れていくわよおお！！！」

「　ぐぬぬぬ、あんちくしょおお。」

その少女、如月　秋奈はいらだっていた。

自分の所属する同好会が創立以来一カ月、初めての活動らしい活動を始めたのが昨日。その日は課題を決めたところで下校時間が来て

しまい残念ながら解散。翌日から詳しい活動内容を決めようということになってその日は部員たちと別れて帰宅をした。

そして翌日。ようやく自分のやりたいことがやれそうだと　1カ月のあいだの、親睦を深めるという名目の放課後のだらだらとした時間も嫌いではなかったのだが　気分をよく登校をして、一日中放課後を待ちながらそわそわと過ごした。

そして待ちに待った授業終了のチャイムを聞くや否や、その日の授業のことなど欠片ほども頭の中に入らないまでに部活のことばかり考えていた秋奈は即効で部室へダッシュ。

彼女に遅れてやってきた組の違う部員達を急かしながらも、とりあえず方針として、聞き込みや校内を回って情報を集めようということまでまとまったのは良かった。

そして、細長く東西に延びる形の校舎を2分して、2人1組でまわり校内を回ろうということになったので、彼女とペアとして組まれたのがカトリーヌ・晴美。

なんでも異国からの留学生で、酔狂なこと、にわざわざこんな田舎の学校が目当てで留学をしに来た、ということをも本人から聞いたことがあった。

そして晴美と担当となった西側の校内をまわること1時間。先生へと聞き込み、生徒へと聞き込み、校内のいたるところをまわり、結局何も分らず惨敗して帰ってきた秋奈は、もの見事に不機嫌となっていた。

さすがに彼女も初日からうまく情報が集まると思っていたわけではないが、しかし分っているのと納得するのは別物で。楽しみにしていた活動に期待を寄せていただけ、初めての部活にして何も分からなかったという結果はすこしばかりやりきれない思いがあった。

結局、部室の備品である長机に額を押しつけながら小刻みに頭を揺らし、低い呻き声をあげる少女に、柔らかい笑みを浮かべお茶とお菓子をそれをなだめる女生徒という奇妙な構図が続くこと数分、この部屋唯一の扉が開き、東まわりの二人が幾分か疲れた表情で帰ってきた。

「ただいまー 　　って何してんの秋奈ちゃん。」

「あー、しんど。」

入ってくるや、ある帰ってきた少年はその幼馴染の奇行にきつちりと反応をし、もう一人の少年は我関せずとばかりにふわりと長机の椅子の内の一つへと座る。

「　　はふう。　　わるいんやけど、お茶いれえてもらえまへんか？晴美はん。」

「はいはい。」

どこから取り出したのか、きつちりと自らのデフォルト装備である名前入りの湯のみを晴美へと渡す凜。そして、やや古めの椅子の背もたれを少しばかりきしませながら、疲労からか大きなため息を一つつけた。

白も若干の混沌とした空気いつもの苦笑いを浮かべながら席に着

く。

2人の帰還を認めた秋奈も、額に少しばかり赤い跡を残しながらもその顔をのそりとあげる。その顔は未だやや不機嫌そうではあるが。

その後、淹れたての煎茶を注いで帰ってきた晴美が、凜へとその湯のみを渡して席に着くのを待ってから、秋奈は口を開いた。

「で？なんかわかったの？」

そのややぞんざいな聞き方に、しかし慣れているのか白は気にした様子もなく、お茶をすする凜に代わり答えた。

「えっと　まあ、手掛かりらしきものがあつたといえはあつたよ。うな。」

「ほんとう！！」

態度一変、先ほどの不満顔はどこへやら吹き飛ばし嬉しそうな表情を浮かべる秋奈の分りやすさに、凜までもが少しばかり笑みを漏らす。

「それで、何がわかったのよ！！」

「ん　えっと、凜君とまわってた時のことなんだけど」

？（後書き）

すみません

切り方しまらないっすね

私、関西弁わからないので自分の創作関西弁になってしまおうと思います。誰か「関西弁こんなじゃねえ」と憤慨してくれる方がいたらアドバイスしてくれるとありがたいです

あと、部屋の想像つかない人いるでしょうか？あんまこだわりないんで、とりあえず少しせまめの文芸部？みたいな感じだと思います。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n0435y/>

黒乃魔術師

2011年12月20日02時47分発行